

〈論 文〉

コンパニオン・アニマルへの 愛着の多次元性

～基本的愛着および依存的愛着と精神的健康との関連～

Examining multi-dimensionality of attachment to companion animals:

Associations between basic and dependent
attachment and the owner's subjective well-being

金 児 恵

Megumi KANEKO

要約

コンパニオン・アニマルに関する先行研究では、ペットに対する関係性の強さと飼い主の精神的健康の関連の方向性に一貫性がなかった。本研究では、その原因を、従来の関係性尺度に、質的に異なる愛着項目が混在していることに求めた。東京都西東京市の住民1,500名（うち回答者803名）を対象とした調査を行った結果、ペットへの愛着は基本的愛着と依存的愛着の二次元に弁別された。そして、この二次元は精神的健康と異なるかたちで関連しており、基本的愛着は低い孤独感と抑うつに、依存的愛着は逆に高い抑うつに関連していることが見いだされた。この結果を踏まえ、ペットと飼い主の関係の性

質をより精緻に捉えていく必要性、また依存的愛着が精神的健康を阻害する原因の解明の必要性を議論した。

キーワード：ペットへの愛着、基本的愛着、依存的愛着、精神的健康

目的

動物をコンパニオン・アニマル (Companion animal ; 以下「ペット」)、すなわち人間の伴侶として家庭内で飼う伝統の長い欧米では、様々な実証研究を通じて、ペットが人の身体的・精神的健康を向上させる心理的効果や、飼い主の対人的交流を広げる対人ネットワーク効果を持つことが明らかにされてきた (例えば Wilson & Turner, 1998)。一方、日本においては、2003 年に、全国で飼われている犬と猫の数が 15 歳未満の子どもの数を超え、「ペットは家族の一員」との認識が広がっているものの、一般家庭で飼育されるペットの効果に関する実証的研究は未だ多くはない (例外として、杉田 (2003) など)。

ペットの心理的効果に関する欧米の先行研究においては、ペットへの愛着と抑うつなどの精神的健康との間には関連がないとする報告もいくつかなされているものの (例えば、Stallones, Marx, Garrity, & Johnson, 1990)、多くの研究で、飼い主とペットとの親密性、あるいはペットへの愛着が強い飼い主ほど精神的健康が高いことが見いだされている。Ory & Goldberg (1983) は、69~79 歳の高齢女性を対象とした調査から、ペット所有と幸福感との間に関連はないが、ペットに対する愛着が非常に強い飼い主は、ペットへの愛着があまり強くない飼い主よりも幸福感が高いことを明らかにしている。

一方、日本で同様の研究を行った金児 (2006, 研究 1) では、これと一貫しない結果が得られている。首都圏において選挙人名簿より無作為抽出した 40 歳以上の男女 1,250 名を対象に行った郵送調査の結果、ペットの所有やペットへの愛着の強さが必ずしも飼い主の高い精神的健康に

つながっておらず、むしろペットへの愛着が強い飼い主ほど精神的健康が低いという負の相関が見いだされた。ペットへの愛着と精神的健康との間に正の関連が見られないばかりか、むしろ負の関連が見られるというこの結果は、欧米の一般的な知見とは正反対である。

では、なぜこのような、先行研究と一貫しない結果が得られたのだろうか。ここで特に着目するのは、金児（2006, 研究1）が用いた愛着尺度の内容の特徴である。本研究の目的は、その詳細な検討を踏まえ、問題点を改善した尺度を用いて再調査を行うことを通じて、ペットとの関係性が実は多次元的であり、それぞれの次元が異なるかたちで精神的健康と関連しているという新たな可能性を検討していくことである。

「ペットへの愛着」の構造の再検討 一二つの次元を分ける

ペット飼育が飼い主に及ぼす効果を検討するためには、人とペットとの関係性を量的に捉える必要があり、これまでいくつかの尺度が作成されている。例えば、Templer, Salter, Baldwin, & Veleber (1981) は、それまでペットとの良好な関係が精神病患者の精神的健康に良い影響があるとの知見があるにもかかわらず、人とペットの関係を実証的に測定した研究がないことを指摘し、ペットに対する態度の好ましさを測定するための“Pet Attitude Scale (PAS)”を開発した。また、Poresky, Hendrix, Moiser, & Samuelson (1987) も、ペット飼育の有無という単純な指標では人と動物との絆 (bonding) が子どもの発達や心身の健康に与える影響を十分に把握できないと考え、人と動物の絆の確立度を測定するための尺度として、“Companion Animal Bonding Scale (CABS)”を作成している。さらに、Albert & Bulcroft (1988) は、人とペットの愛着関係を測定する尺度“Pet Attachment Scale”を作成した。これは、Rubin (1973) が指摘した人間と人間との間の愛情関係 (loving relationship) の3つの下位概念、すなわち“intimacy” (親密性：二人の人物の間の結びつきと

絆)、“caring”(保護：相手のための自己犠牲をいとわない意欲)、“attachment”(愛着：相手にそこにいてほしい、相手と身体的に接触したい、承認されたい、そして保護されたいという強い欲望)の分類が、ペットと人との関係にも適用できるとの考えの下に作成されたものである。

金児(2006, 研究1)で用いられた愛着尺度は、Albert & Bulcroft(1988)のPet Attachment Scaleから抽出した3項目(「友人の多くに対してより、ペットに親しみを感じる」「家族の誰に対してよりも、ペットに親しみを感じる」「ペットが私の親友だと思うことがある」)にオリジナルの4項目(「ペットは私の気持ちがわかる」「ペットは私の生活を助けてくれている」「ペットは家族の絆を強めてくれている」「ペットによく話しかける」)を加えた計7項目であった。先述のように、当該の研究では、この尺度で測定されたペットへの愛着度と飼い主の主観的幸福感との間に負の相関が見られた。

しかしここで、この尺度に含まれたAlbert & Bulcroftによる3つの項目を詳細に吟味すると、先述のCABSなどの既存の尺度項目と比べ、ある独特の特徴があることに気付かされる。それは、「友人の多くに対してより、ペットに親しみを感じる」「家族の誰に対してよりも、ペットに親しみを感じる」「ペットが私の親友だと思うことがある」となっており、人間関係との比較においてペットがより重要な存在であるとの認識を測定するものであるという点である。ペットとの関係を人間関係よりも重視するこうした関与のあり方は、ペットに対する過度の心理的密着を反映している可能性はないだろうか。

ヒトと動物の関係学会(2001)で開催されたシンポジウム『ペットに依存する社会』において、獣医師の井本忠夫は「ペットに依存している」と考えられる人々の特徴のリストを挙げた(表1)。依存的な人は、ペットを他の人間よりも重視し、身体的に密着し、心を通じ合うことができる唯一の他者と捉え、常に気にしている。井本は、このようにペットと

非常に密着している飼い主について、ペットの治療方針の決定に際して獣医師の言うことを聞かず、ペットが重篤な状況になるまで自分の方針を曲げない人がしばしばみられるという問題点を指摘した。やはり獣医師の宮田勝重も、「猫の看病のために仕事を辞めました」という患者や、治療費のために生命保険を解約したという患者を取りあげて、「ペットと人の距離が保たれなくなってきているのではないか、あまりにも精神的にのめり込み過ぎているのではないか」と述べている（宮田，2001）。あるいは、「この子がいれば子供は要らない」という若い飼い主や、「孫より可愛い」とか「この子だけが私の気持ちをわかってくれる」という中高年飼い主の存在もマスコミなどで取り上げられる。金児（2006）において愛着尺度得点と精神的健康の間の負の相関がみられた原因の一つは、使用された愛着尺度の中にこうした依存的な愛着を示す尺度項目が複数含まれていたことではないだろうか。

表1 ペットに依存している人の特徴（井本（2001）を元に作成）

-
- 1) ペットは子供あるいはそれ以上の存在と思い
 - 2) ペットと、いつも、一緒に寝て
 - 3) ペットが寄って来たときに、いつも、さわり抱き
 - 4) 自分からも、いつも、さわりにいき抱きにいき
 - 5) いつも、話し相手であり
 - 6) いつも、重要な話をしたり、心の内を打ち明け
 - 7) 外出していても、いつも、気になり
 - 8) 外出していても、いつも、早く帰り
 - 9) ペットが死ぬことを考えたことがなく
 - 10) 重篤な病気になったとしても安楽死を考えない人
-

なお、ここで確認しておく必要があるのは、ここで用いている「依存的」という修飾語がいかなる意味を持つのかである。依存は多義的な概念であるが、本研究では「人が自らの精神的な安定性を保つために、精神的にペットに頼っている状態」と定義する。精神医学の分野における

「依存症」の概念は、(アルコールなどの)対象が欠乏した状態では不安になったり鬱になったり身体症状が出たりというように、患者が対象に精神的に頼っている状態を指すものである。

もちろんすべての飼い主がペットとこうした依存的な関係を持っているわけではない。多くの飼い主は、ペットを可愛がり、日々その世話をしつつも、それにとらわれて自分の行動が制限されているわけではない。実際、先行研究で用いられた尺度の項目には、「ペットを飼うのが好きである」などの基本的な関係性やそこから得る心理的効果を問うものも多い。国内の先行研究でも、安藤(2000)によるペットとの情緒的一体感尺度では、「ペットと一緒にいると、ほっとする」、「ペットは私を幸せな気分にしてくれる」など、ペットから精神的な安らぎを得ることに中心的な焦点が当てられている。こうした感情は、井本の指摘する「依存的な人」でなくても、ペットを飼っていれば感じる人が多いと考えられる。

以上のように、一言に「ペットへの愛着」と言っても、その関係の質には、様々なタイプがあると考えられる。より具体的には、ペット可愛いと愛でる気持ちや、そこから得る癒しなど純粋な心理的効果を意味する基本的愛着と、ペットに対する極端な精神的密着や依存を意味する依存的愛着とが、質的に異なる関係性として存在しているのではないだろうか。そしてその二種類の愛着が、飼い主の精神的健康や対人関係とそれぞれ別の形で関連している可能性がある。つまり、ペットと飼い主の関係には多様性があり、一概に「関係性が強いほど精神的健康が高い」であるとか「関係性が強いほど精神的健康が低い」などとは言えず、関係の質的な特性と精神的健康との関連を検討する必要があるのではないだろうか。先行研究ではこうした区別が明確に為されておらず、もしかしたらそのことが、一貫しない知見を生じさせていたのかもしれない。そこで本研究では、飼い主とペットとの関係性を「基本的愛着」と「依

存的愛着」と概念的に分離し、飼い主の精神的健康と負の関連を持つのは依存的愛着であるとの仮説を検証する。

仮説1：ペットへの愛着は、基本的で健全な愛着と、依存的な愛着の二次元に分けられるだろう

仮説2：ペットへの依存的愛着が高いほど、精神的健康が低いだろう

なお本研究では、副次的な検討課題として、ペットの飼い主と非飼い主の間で、果たして精神的健康が異なるのかを検討する。これは、しばしば聞かれる「ペットの飼い主はそもそも孤独な人だ」との言説の真偽を確認するためである。

方法

(1) 調査方法と質問項目

2003年3月に、東京都西東京市において郵送による質問紙調査を行った。西東京市は東京23区の北西に隣接したベッドタウンであり、北は埼玉県に接する。2001年1月、田無市と保谷市が合併して成立した。平成15年度の人口は180,276人、面積15.75km²、世帯数79,398戸で、住宅地が41.7%を占めていた。生産年齢人口(15~64歳)は69.4%、老年人口(65歳以上)17.6%と、ほぼ東京都全体の人口比と等しい(東京都全体ではそれぞれ70.9%、17.1%)。(人口に関するデータは、ともに2003年1月1日現在の住民基本台帳による)

【母集団人口】 抽出台帳として用いた選挙人名簿は2002年12月2日作成のものであり、登録者数(有権者数)は148,219名(男性73,409名、女性74,810名)であった。そのうちの40歳以上の有権者を母集団とした。

【サンプル】 2003年1月29日と30日に、選挙人名簿より40歳以上の

男女1,500名を抽出した。西東京市にある36投票区の人口比にしたがい、各地点からの抽出人数を算出した。各地点から、21～63名を等間隔に抽出した。

【調査の実施方法】 調査は2003年3月に「人付き合いと生活に関するアンケート」という名称で、郵送法で実施された。調査票発送後2週間目に督促状を郵送した。

【回収状況】 回収された調査票のうち、フェイスシートに記入された性別や年齢が抽出台帳記載のものと違っているものは本人以外が回答した無効票と見なし、残りの803名を有効票とした。なお、1,500名に調査票を郵送したが、15名については転居先・宛先不明などの理由で本人には届かず、この分を差し引いて算出した有効回収率は54.1%であった。回答者の平均年齢は約60.2歳、男女の内訳は男性355人、女性448人であった。全回答者中、現在ペットを飼っていると答えた回答者（以下「飼い主」）は無回答9名を除いた有効回答票の19.2%である153人（うち男性66人、女性87人）、非飼い主は80.9%の650人であった。

表2 回答者の分布（人数と行比率）

	世代						合計
	40代	50代	60代	70代	80代	90代	
男性	80	89	87	81	18	0	355
	22.5	25.1	24.5	22.8	5.1	0.0	100.0
女性	96	135	118	73	21	5	448
	21.4	30.1	26.3	16.3	4.7	1.1	100.0
合計	176	224	205	154	39	5	803
	21.9	27.9	25.5	19.2	4.9	.6	100.0

（上段：度数、下段：％）

【質問項目】

①ペットへの愛着（飼い主のみ） 先述のように、本研究では関係性の二

つの次元を弁別することを目指したため、ペットとの依存的な関係性や、より健全な形の関係性を測定できると思われる項目を幅広く抽出した。まず、ペットとの依存的関係を示すと考えられる項目として、金兎(2006)で用いられた、「家族の誰に対してよりも、ペットに親しみを感じる」と「ペットが私の親友だと思ふことがある」を用いた。また、先述の井本(2001)に基づき、「ペットにいつも、重要な話をしたり、心のうちを打ち明けたりする」と「外出していても、いつもペットのことが気になって早く帰る」との項目を作成した。一方、どちらかといえば基本的で健全な関係を測定すると考えられる項目として、安藤(2000)のペットとの情緒的一体感尺度より、「ペットと一緒にいるとほっとする」「ペットは私を幸せな気分にしてくれる」の2項目、またその反転項目として、「なるべく、ペットの面倒は見たくない」「ペットを飼うことはお金のむだ遣いである」の2項目を用いた。さらに、ペットに対する行動項目として、「ペットによく話しかける」「ペットと一緒に寝る」「ペットの写真を持ち歩く」「ペットにおしゃれをさせる」を用いた。以上の12項目を、飼い主のみに対して、行動に関する4項目については「まったくしない」「あまりしない」「ときどきする」「いつもする」の4件法、それ以外の項目は「あてはまらない」「あまりあてはまらない」「ややあてはまる」「あてはまる」の4件法で回答するよう依頼した。

②**精神的健康(全回答者)** 飼い主と非飼い主を含む全回答者の精神的健康を測定するため、主観的幸福感、孤独感、および抑うつ傾向に関する質問をした。主観的幸福感については、「今の生活に満足している」「日々の生活の中で、幸せを感じることが多い」の2項目を用いた。孤独感については、改訂版 UCLA 孤独感尺度日本語版(工藤・西川, 1983)より、「まわりの人から孤立していると感じることがある」「私はひとりぼっちだと感じる」の2項目を採用した。抑うつ傾向については、Radloff(1977)による CES-D (Center for Epidemiological Studies

Depression Scale) 尺度 (日本語訳は矢富・Liang・Krause・Akiyama, 1993 による) より、「誰にも気分の沈みがちな時がありますが、この2週間に、あなたは次にあげるようなことがどのくらいありましたか」との問いに引き続き、「ふだんは気にかからないことが気になった」「何をすることも、なかなかやる気が起こらなかった」「悲しいことがたくさんあると感じる」の3項目を採用した。回答者には、主観的幸福感と抑うつ傾向については「あてはまる」から「あてはまらない」までの4件法、孤独感については「しばしばある」から「めったにない」の4件法で賛成度を尋ねた。

③**デモグラフィック要因 (全回答者)** 回答者のデモグラフィック要因として、年齢、性別、健康状態、経済状態を尋ねた。健康状態については、「全般的に言って、あなたの現在の健康状態はいかがですか。」との問いに対して、「1. とても健康」～「5. まったく健康でない」の5段階で答えるよう求めた。経済状態については、「あなたのお宅の毎月のやりくりはいかがですか。」との問いに対して、「1. 非常に苦労している」～「5. まったく苦労していない」から選択するよう求めた。

結果

1. 尺度構成

精神的健康に関する尺度の信頼性を確認するため、主観的幸福感および孤独感についてはピアソンの積率相関係数、抑うつ傾向についてはクロンバックの α 係数を求めたところ、それぞれ $r = .60$ 、 $r = .68$ 、 $\alpha = .72$ 、と十分な値が得られた。よって、各尺度について全項目の平均をそれぞれの尺度値として以降の分析で用いた。

2. 基礎データ

主たる仮説検証に先立ち、そもそもペットを飼う人の精神的健康が非

飼い主より低いのではないかとの言説の真偽の確認のため、主観的幸福感、孤独感、抑うつ傾向について飼い主と非飼い主を t 検定を用いて比較した。その結果、いずれも有意な差は認められなかった(表3)。つまり、飼い主と非飼い主の間に、孤独感を始めとした精神的健康の違いは見られず、「ペットを飼う人はそもそも精神的健康が低い」とは言えないことが示された。

表3 飼い主と非飼い主の精神的健康

	飼い主	非飼い主	t
幸福感	3.16 (.65)	3.08 (.71)	1.14
孤独感	1.99 (.71)	2.09 (.75)	-1.49
抑うつ傾向	2.08 (.74)	2.10 (.74)	-.19

上段は平均、下段は標準偏差。 t 値は差の検定(すべて有意差なし)。

3. ペットへの愛着の二つの次元

「ペットへの愛着には基本的で健全な愛着と、依存的な愛着の二次元が存在する」との仮説1を検証した。まず12個の愛着項目を因子分析(主成分解バリマックス回転)にかけた。すると2つの解釈可能な因子が抽出された(表4)。各因子に負荷の高い項目の内容を検討した結果、第I因子にはペットから安らぎを得ると同時に、飼育に対する責任を持つという関与のあり方を示す項目の負荷が高く、第II因子にはペットを親しい人間の代わりともみなしかつペットに精神的にコントロールされるような関与のあり方を示す項目が多かった。これらは、井本(2001)の指摘した依存的な飼い主のあり方にも合致するものである。すなわち予測通り、前者は基本的愛着、後者は依存的愛着の次元であると解釈しよ

表4 ペットとの愛着関係の次元（因子分析）

	因子負荷量		共通性
	I	II	
第I因子：基本的愛着			
ペットと一緒にいると、ほっとする	.835	.269	.769
ペットは私を幸せな気分にしてくれる	.795	.361	.763
なるべく、ペットの面倒はみたくない（反転）	.667	.250	.507
ペットを飼うことはお金のむだ遣いである（反転）	.639	-.203	.449
ペットによく話しかける	.632	.328	.506
ペットと一緒に寝る	.579	.273	.410
第II因子：依存的愛着			
ペットにいつも、重要な話をしたり、心のうちを打ち明けたりする	.093	.812	.667
家族の誰に対してよりも、ペットに親しみを感ずる	.159	.795	.657
外出していても、いつもペットのことが気になって早く帰る	.256	.695	.548
ペットにおしゃれをさせる	.125	.658	.448
ペットの写真を持ち歩く	.366	.514	.398
ペットが私の親友だと思うことがある	.452	.506	.460
負荷量平方和	3.37	3.21	
寄与率（%）	28.08	26.78	

そこで、各因子に負荷の高い項目（表中の網掛け部分）を取り出して信頼性係数を算出したところ、それぞれ $a = .82$ 、 $a = .82$ といずれも高い値を示したので、反転項目の得点を逆転した上で各因子に属する項目得点をそれぞれ平均したものを基本的愛着尺度、および依存的愛着尺度として以下の分析で用いた。

なお、参考までに、飼っているペットが犬か猫かによって関係性に違いが見られるかどうかについて t 検定を行ったところ、両者に愛着の差は見られなかった（基本的愛着：犬 $M = 3.14$ 、 $SD = .60$ ；猫 $M = 3.34$ 、 $SD = .58$ ； $t = -1.76$ 、 $df = 138$ 、 $p < .10$ 、依存的愛着：犬 $M = 1.87$ 、 $SD = .64$ ；猫 $M = 1.92$ 、 $SD = .72$ ； $t = -.43$ 、 $df = 139$ 、 ns ）。

4. 二つの愛着次元と精神的健康との関連

依存的愛着は、飼い主の精神的健康を低下させるだろうとの仮説2を

検証した。主観的幸福感、孤独感、抑うつそれぞれのそれぞれを従属変数、基本的愛着と依存的愛着を独立変数、そして性別、年齢、経済状態、および健康状態を統制した重回帰分析を行った。その結果、主観的幸福感と孤独感については依存的愛着との有意な関連は見られなかったものの、依存的愛着が強い人の方が抑うつ傾向が強いとの結果が得られ(表5)、仮説は一部支持された。一方、基本的愛着については孤独感や抑うつと負の関連を持っており、基本的愛着の強い人ほど抑うつが低く、孤独感が低い傾向があることがみいだされた。なお、ペットの種類(犬/猫)を分析に投入しても結果のパターンは変わらず、ペットの種類の効果自体もみられなかった。

表5 二つの愛着次元と精神的健康の関連(重回帰分析)

	主観的幸福感	孤独感	抑うつ
性別(男性=1、女性=2)	.15 [†]	-.01	.27**
年齢	.12	-.23**	-.02
経済状態	.38***	-.27**	-.28***
健康状態	.19*	-.17*	-.19*
基本的愛着	.11	-.19 [†]	-.25*
依存的愛着	.09	.08	.35***
自由度調整済み R ²	.24***	.17***	.24***

標準化偏回帰係数。*** $p < .001$ 、** $p < .01$ 、* $p < .05$ 、[†] $p < .10$

考察

本研究では、ペットと飼い主の関係性を多次元的に捉え、そのそれぞれの次元が飼い主の精神的健康とどのように関わっているかを、社会調査によって検討した。その結果、ペットとの関係性には、「強い」もしくは「弱い」という単純な量的な違いだけではなく、基本的愛着と依存的愛着という質的に異なる二次元があること、そして前者の基本的愛着は高い精神的健康(具体的には低い孤独感と抑うつ)に関連しているのに対し、後者の依存的愛着は逆に低い精神的健康(高い抑うつ)に関連し

ていることを見いだした。ペットとの関係の質的多様性を捉え、それが精神的健康と異なるかたちで関連することを示した知見は従来のヒューマン・アニマル・ボンド研究にはなく、新たな視点を投げかけるものである。

ではなぜ、依存的愛着が高い飼い主は、精神的健康が低い—具体的には抑うつ傾向が高いのだろうか。その理由は少なくとも二つが考えられる。第一は、何らかの理由—例えば対人関係の不調—で抑うつ傾向が高まった飼い主が、それを埋め合わせるためにペットに対して依存的愛着を持ちやすくなる、というプロセスである。たしかに、そうしたプロセスは論理的にはあり得るだろう。とはいえ、ここで依存的愛着と抑うつとの間に正の相関が得られたことは、ペットに対して依存的な愛着を持つことにより、飼い主たちの抑うつが十分に回復されているとはいえないことを意味しており、「ペットとの愛着関係を強めれば心理的に良い効果が期待できる」との言説を十分に支持するものとはいえない点には注意が必要である。

第二の解釈は、依存的愛着が高いことが抑うつ傾向の低下をもたらすという因果関係である。金児（2006, 研究2）は、40歳以上の男女23名に対するインデプス・インタビュー調査の結果から、飼い主はペットを通じて他者との交流を行ってはいるものの、その人々と深い関係になることは少なく、ペットがいるために買い物に行けなくなったり家族全員で旅行に行けなくなったりと飼い主の社会関係が制限される可能性があること、特に飼い主ではない人々からしばしば躰やマナーに関する否定的反応を受けていることを明らかにしている。さらに、同じ人物であっても、側に犬や猫がいる場合といない場合を比較すると、側に犬や猫がいる場合の方が当該人物の印象が否定的なものになるとの知見もある（金児, 2003）。さらに、Uchida, Norasakkunkit, & Kitayama (2004) の文化心理学研究から、相互協調的自己観が優勢な日本では、相互独立的自

己観の優勢な欧米とは異なり、個人の幸福感を高めるのは個人の自尊心よりも周囲の人々との協調的な社会関係の影響が大きいことが明らかになっている。これらの知見を踏まえると、欧米ではたとえペットとの関係性が依存的であるゆえに周囲の人々との対人関係に悪影響が及ぶとしても、一方でペットとの関係において高い自尊心が得られれば幸福感が高まるのに対し、日本ではペットと依存的な関係性を強めることにより、飼い主の社会関係にマイナスの影響がもたらされ、それを媒介として抑うつ傾向が高まるなど精神的健康が低下するとプロセスの存在も予測できるのである。今後の研究においては、上記のいずれの解釈が正しいのか、両方とも正しいのか、あるいは第三の説明がありうるのかについて、さらなる検討が必要である。

結語

単身者の増加や核家族化が進む現代社会の中で、人々の生活におけるペットの存在感は今後ますます増大していくことが予想される。だが、ペットとの関係に、精神的健康を高めるような関係性と、逆にそれを阻害する関係性があることを示唆した本研究の結果は、「ペットを飼えば幸せになれる」というありがちなイメージに対して警鐘を促すものである。もしペットへの溺愛により自立した人としての客観的なものの見方のバランスが崩れたり、ペットからコントロールされるような関係に陥ったりした結果、周囲の人々との対人関係が破壊されるのであれば、それは決して望ましい帰結とは言えないのではないだろうか。飼い主とペットが社会の中でより幸せに暮らしていけるような健全な関係性を模索していくことが今後の課題である。

引用文献

Albert, A. & Bulcroft, K. (1988). Pets, Families, and the Life Course. *Journal of*

- Marriage & Family*, **50**, 543-552.
- 安藤孝敏 (2000). ペットとの交流が地域老人の精神的健康および幸福感に及ぼす影響. 日本火災福祉財団 平成 10 年度ジェロントロジー研究報告, 11-18.
- ヒトと動物の関係学会 (2001). 第 6 回学術大会シンポジウム②「ペットに依存する社会」ヒトと動物の関係学会誌, **9・10**, 40-63.
- 井本史夫 (2001). 飼い主の思いと行動 — 臨床獣医師の視点から ヒトと動物の関係学会誌, **9・10**, 51-55.
- 金見恵 (2003). 動物の存在が人物の印象に及ぼす影響 *Animal Nursing*, **8**, 15-23.
- 金見恵 (2006). コンパニオン・アニマルが飼主の主観的幸福感と社会的ネットワークに与える影響 心理学研究, **77**, 1-9.
- 工藤力・西川正之 (1983). 孤独感に関する研究 (I) — 孤独感尺度の信頼性・妥当性 — 実験社会心理学研究, **22**, 99-108.
- 宮田勝重 (2001). 日本の経済成長とペットに対する意識の変化 ヒトと動物の関係学会誌, **9・10**, 40-44.
- Ory, M. G. & Goldberg, E. L. (1983). Pet possession and life satisfaction in elderly women. In A H. Katcher & A M. Beck (Eds.), *New perspectives on our lives with companion animals* (pp 303-317). Philadelphia, PA: University of Pennsylvania Press.
- Poresky, R. H., Hendrix, C., Moiser, J. E., & Samuelson, M L. (1987). The companion animal bonding scale: Internal reliability and construct validity. *Psychological Reports*, **60**, 743-746.
- Radloff, L.S. (1977). The CES-D Scale: A self-report depression scale for research in the general population. *Applied Psychological Measurement*, **1**, 385-401.
- Rubin, Z. (1973). *Liking and Loving*. New York: Holt, Rinehart and Winston.
- Stallones, Marx, Garrity, & Johnson. (1990). Pet ownership and attachment in relation to the health of U.S. adults, 21 to 64 years of age. *Anthrozoos*, **4**,

100-112.

- 杉田陽出 (2003). 犬の飼育と犬に対する愛着度が飼い主の身体的健康と精神的健康に及ぼす効果 — JGSS-2001 のデータから —. 大阪商業大学比較地域研究所・東京大学社会科学研究所編『日本版 General Social Surveys 研究論文集 [2] JGSS で見た日本人の意識と行動』(pp.127-143).
- Templer, D. I., Salter, C. A. Baldwin, R., & Veleber, D. M. (1981). The construction of a pet attitude scale. *The Psychological Record*, **31**, 343-348.
- Uchida, Y., Norasakkunkit, V., & Kitayama, S. (2004). Cultural constructions of happiness: Theory and empirical evidence. *Journal of Happiness Studies*, **5**, 223-239.
- 矢富直美・Jersey Liang・Neal Krause・Hiroko Akiyama (1993). CES-D による日本老人のうつ症状の測定 — その因子構造における文化差の検討 —. *社会老年学*, **37**, 37-47.

